

国内事例
in Japan

1

古くて新しい暮らし方 能登半島最先端の実践者



大野さんが自ら描く、里山の多面的機能を体感できる農園。

「〇〇があれば何だってできますよ。」

お話を聞いた中で最も強く印象に残ったのがこの一言だった。言葉の主は、能登で新たな生業づくりに挑んでいる大野隆志さん。「〇〇」に入るのとは何か？ それは後で明かすことにして、まずは考えてみたい。自分にとって「〇〇」は何だろうか？

能登の里山里海

国連から「世界農業遺産」に認定された能登の里山里海。人と自然の共生がこの地域にある。一方で、過疎高齢化が急速に進行している。里山里海の豊かな地域資源を守り、そして活用していく担い手の確保。それが地域の持続可能性への鍵である。

閉校となった^{すず}珠州市立^{こども}小泊小学校の校舎を再利用して、2006年に「金沢大学能登学舎」が開設された。2007年からは、主に若手社会人を対象とする人材育成講座が始まった。名称や内容を少しずつ変え、現在は「能登里山里海SDGsマイスタープログラム」として実施されている。これまで13年間で延べ196名の修了者（マイスター）を輩出した。

パーマカルチャーを小さく実践

そのマイスターのひとりが、冒頭で紹介した大野隆志さん（2013年修了）である。自然の仕組みを生かして持続可能な暮らしをつくるパーマカルチャーを実践するため、会社を辞めて2014年に移住した。現在、

珠州市三崎町の土地を借り、鶏と山羊を飼いながら小規模な農業を実践している。これらの生き物の糞が土を肥やす。その土で育てた作物を人が食べる。

単純なことに聞こえるが、ここに至る道のりは決して平坦ではなかった。構想に適した土地がなかなか見つからず、断念の潮時かと思い始めた2019年、マイスター仲間でもある地元工務店の今井誠さん（2018年修了）を通じて現在の土地のことを知った。「本当に欲しい情報は人づてにしか得られません。そのためには、自分がまず発信するしかない。発信によって仲間が情報をつないでくれるようになるのです。」大野さんはこう語る。

大野さんの発信は「タイニーハウ

ス」の製作だった。軽トラックに積める小さな家。その材料となった木は、今井さんがマイスタープログラムの卒業研究の一環で自ら買ってきた能登の杉の間伐材である。自作のタイニーハウスは地域のイベントで子供が喜ぶ人気の展示物となり、県内のテレビ番組でも紹介された。このような発信が、他の人たちからの提案や情報を集めることにつながる。

現在、大野さんの農園には新たな小屋が増えつつある。生き物の棲み家として使うものもあれば、人がここでの暮らしをまず試してみるためのものもある。

小規模（タイニー）な住まいや生業が集まる場所という意味で、この農園を大野さんは「タイニーズファーム」（仮称）と呼んでいる。仲間が増え、農園がいずれコミュニティに育つことを大野さんは目指している。

専業農家だけが選択肢ではない。時間をやりくりして、インターネットを活用した「デジタル副業」する人がいてもよいと大野さんは言う。昔の生活様式に単純に戻るのではない。自然と共に暮らすという原点に回帰しつつも、時代に合った新たな暮らし方を作っていくことができる。仲間が増えれば、それぞれの得意分野も多様化し、お互いの労働の交換と協働もしやすくなる。

労働の交換の伝統的な仕組みとして「結い」があり、珠洲の言葉では「^{ええ}ゑ」と呼ばれる。ゑゝの精神でつながる有志が力を合わせて自ら運営する無農薬野菜市「ゑゝ市」。運営者のひとりである大野さんは、自分がつくった食べものをゑゝ市で売っている。お金のためというより、情報を発信し、そして受け取るため

のつながりの場という意味が強い。

「新型コロナウイルス感染症が示した危機は、結局のところ都市における過密の問題です。地方での我々の暮らし方は基本的に変わりません。」大野さんはこう述べる。過密都市で暮らすことに違和感を持つ人が自分にできることを本気で考えるきっかけになるという点では、「何十年に一度のチャンス」と表現する大野さんの言葉には説得力がある。

それぞれの持ち場で果たせる役割

大野さんは移住者だが、もちろん地元出身者のなかにも里山里海を生かした生業と地域づくりを志す人たちがいる。そして、地元住民と移住者の間をつなぐ人たちもいる。必要な役割はたくさんあり、それぞれの持ち場でみな試行錯誤しながら前に進んでいる。

さて、冒頭の「〇〇」である。大



大野さんの農園。中央の小屋は、軽トラックの荷台に積載可能なタイニーハウス。右奥の鳥小屋は建設中。

野さんの言葉は「覚悟」だった。

「覚悟があれば何だってできますよ。」

古くて新しい暮らし方を能登半島最先端で実践する人たちがいる。これらの人たちが示すのは、覚悟の決め方なのかもしれない。

北村健二（きたむら けんじ）

金沢大学先端科学・社会共創推進機構 特任助教。能登里山里海 SDGs 研究部門（珠洲市）に従事しつつ、産学官金の協働プラットフォーム組織である「能登 SDGs ラボ」の社会分野コーディネーターを兼任している。



ある日の「ゑゝ市」。手前に見えるのは大野さんが売る卵。その日の朝に産まれた新鮮なものも含み、程なく完売した。